

2017年9月17日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 9章 20～31節

説教：イエスはキリスト

はじめに

五旬節と呼ばれるペンテコステの日、弟子たちが一つ家で祈っていた時のことです。大きな音とともに天から聖霊が降り、そのことをきっかけにして大ぜいの人たちが救われ、世界最初のキリストの教会が建てられていきます。ところがいっぼうで教会の事を苦々しく思う人たちも現れます。その筆頭にいたのが、ユダヤ教のなかでもっとも原理主義的で活動的なグループであるパリサイ派に属していたサウロという人でした。エルサレムの教会を迫害することはもちろん、それでも飽きたらず、エルサレムから遠く離れたダマスコの町にまで出かけ、そこにある教会を迫害しようと企てます。ところが、そのダマスコに向かう途上、サウロはよみがえられたイエスに出会い、劇的な回心を遂げます。ユダヤ人の中でもっとも迫害に熱心だった者が、ある日を境にして今度はイエスの御名を熱心に宣伝する者になる。ご想像のとおり、本人もそうでしょうが、敵であれ味方であれ周りは驚き、とまどってしまいます。やがて教会は、このサウロを受け入れていくことになるのですが、すんなりで行ったわけではありません。いったい何が起きていたのか、見ていきます。

1 ダマスコで

1) キリストを信じるサウロ

サウロは、若いときから律法を学び、律法を守ることで人は救われると信じていました。ところが、教会は大切な律法を軽んじ

人々を惑わしている。そんな教会は、この世から抹殺しなければならない。教会を迫害することこそ自分の使命であると考えます。ところが、ダマスコに向かう途上でイエスが現れたとき、サウロはこのような語りかけを聞くことになります。「わたしはあなたがた迫害しているイエスである。」

イエスと呼ばれる男は十字架で死んだはずではないのか。目を開いていても何も見えません。普通の人声ではない。ただ、きよい方が語っていることだけはわかる。この方は神なのか。もしそうであるなら、自分は何をしてきたことになるのか。神のためにと一生懸命してきたことが、実は神を迫害してきたことになる。これは大変な罪です。驚きと衝撃のあまりへなへなと地面に倒れてしまいます。

仲間に支えられながらやっとの思いでダマスコにたどりつくのですが、頭が混乱して食事も喉を通りません。それから三日してアナニヤがサウロの所に遣わされます。彼が手を置くとサウロの目が開き、聖霊に満たされるのがわかりました。神を迫害するという大きな罪を犯した者でも、イエスはその罪を赦して下さったことがわかりました。それでバプテスマを受けます。このようにしてサウロはクリスチャンとなりました。

そこまではよかった。しかし、サウロは二つの大きな問題に直面しなければならなくなります。一つは教会。二つ目は自分が属していたユダヤ人。

2) 教会はサウロを警戒した

まず教会はどうしたのか。サウロがダマスコに来て、クリスチャンたちを迫害しようとしているとの情報はいち早く伝わっていて、みな不安を感じています。そこへサウロが突然目の前に現れたわけですから相当混乱したはずで、そればかりではない。サウロの口から「イエスは神の子である」ということばを聞いて、もっと驚いた。耳を疑うとはこのことです。これは畏か、なにか裏があるに違いない。とても信用できない。これが最初の反応でした。しかし、アナニヤが立って主イエスが自分に語ってくださったことをあかしし、説得した結果、サウロはダマスコの教会に迎えられていきました。

3) ユダヤ人はサウロを殺害しようとした

サウロの活動は教会の中だけに留まらない。22節にこうある。「しかしサウロはますます力を増し、イエスがキリストであることを証明して、ダマスコに住むユダヤ人たちをうろたえさせた。」

ユダヤ人の前に自分の身をさらすことがどんなに危険であるかをサウロは知っています。つい昨日まで自分がそこにいたので、ユダヤ人の考えが手に取るようにわかる。自分を殺しにかかるだろうということは予想した。それでも彼らの所に向かいます。案の定、サウロ暗殺計画が持ち上がりますが、すんでの所で情報をキャッチしたサウロは夜中のうちにダマスコから脱出し、難を逃れました。

2 エルサレムで

1) バルナバ (4章36節)

次にサウロが向かった先はエルサレムの

教会です。しかしここではダマスコの教会のように行かない。立ち入り禁止処分を受けます。

そんなとき現れたのがバルナバでした。このバルナバのことは4章36節で紹介されています。「キプロス生まれのレビ人で、使徒たちによってバルナバ(訳すと、慰めの子)と呼ばれていたヨセフも、畑を持っていたので、それを売り、その代金を持って来て、使徒たちの足もとに置いた。」

多くの献金をして教会を牛耳るということとはときどき起きることで、もちろんそういうことではない。彼は使徒たちからも信頼され、後にサウロと一緒に伝道活動するなど非常に大きな働きをしていく人です。そんなバルナバと、このときまったく身寄りがなかったサウロとが会えることができたのは、神のご計画というほかありません。バルナバは、路頭に迷っていたサウロを自分の家に引き取り、いろいろ世話することにします。バルナバもサウロがどんなに危険な人物であるか知っているの、これは相当の決断です。サウロからこれまでのいきさつをじっくりと聞き出し、これは間違いないと判断し、使徒たちと面談ができるよう骨を折ります。サウロがイエスから何を聞き、ダマスコで何をしてきたのかバルナバはまるで弁護士のように、サウロの側について支え続けました。その結果、ようやくサウロは教会に自由に出入りすることができるようになりました。

2) タルソから異邦人の地へ

しかしいっぽう、サウロは裏切り者として指名手配されていることは変わらない。エルサレムにいることは非常に危険なので、しばらくサウロの故郷であるタルソに戻るこ

にします。タルソはいまのトルコ共和国の地中海に面したところにあります。イスラエルを離れるということで、またもや逃亡生活に逆戻りです。

サウロを召したイエスはこう言われました。「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」(15 節) サウロを選んだのは神です。しかしそのサウロは海外へ脱出し、神の計画はまったく進む様子がない。そんなふうに見えます。実はそうではない。サウロがイスラエルを離れることで、異邦人の地に向かってキリストの福音を宣べ伝えてるきっかけになっていく。それが後からわかっていきます。神のご計画というのは本当に不思議だと思えます。

3 教会

1) 迫害の記憶

ここまでサウロの歩みを見てきました。次に考えたいことがあります。教会は、バルナバの努力もあってサウロを受け入れることにしました。それは簡単なことだったのかどうかです。エルサレムの教会がどんな所を通ってきたか思い出していただきたい。8章1〜3節を読みます。「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。敬虔な人たちはステパノを葬り、彼のために非常に悲しんだ。サウロは教会を荒らし、家々に入って、男も女も引きずり出し、次々に牢に投げ入れた。」

これは昔のことではない。つい先日起きたことです。サウロのせいで、ステパノが殺されました。家族がエルサレムにいられなくな

り、着の身着のままで逃げ出し、一家離散したという者もたくさんいました。家族が牢屋に入れられた。それだけで厳しい差別といやがらせに会ってきた。その記憶も生々しいときに、自分たちを苦しめてきたサウロが現れ、教会に迎えなさいと言われる。とてもできそうにありません。ダマスコの教会もエルサレムの教会も、サウロを拒否しました。当然だったと思います。

しかしいつまでもそんな状態が続いて良いということではなかった。神は教会に働いておられました。神はそのバルナバに働きかけます。サウロは確かにひどい罪を犯した。けれどもいま彼は自分の罪を自覚し、聖霊を受け、主に救われていることははっきりとわかる。であるなら、サウロが教会に入れない理由は何もない。バルナバは使徒たちとかけあい仲介の労を執ることにします。

2) 私たちも私たちに負い目のある人たちを赦しました

バルナバの話を聞いて、教会はどう思ったのでしょうか。当然、強い反対意見が起きたでしょう。すんなりとサウロを受け入れたとは思われません。それでも教会は、様々な意見の対立を乗り越え、サウロは自分たちの兄弟であると宣言します。なぜそれができたのでしょうか。そのことを最後に考えます。

主の祈りにこうあります。「私たちの負い目をお赦しください。私たちも私たちに負い目のある人たちを赦しました。」毎週礼拝の中で、あるいはことあるごとに祈ります。初代教会の人たちも祈っていました。口で言うのは簡単です。では実際にほかの人を赦しているのか。あの人は赦した。でもこの人のことは赦せない。主の祈りを祈るたびに複雑

な思いにかられる、それが私たちではないですか。

赦さなければと願っても、人を赦せない自分に悲しみます。いったいどうしたらよいのでしょうか。そもそも私たちはだれに赦されたのでしょうか。私たちの主であるイエス・キリストが十字架で赦してくださいました。それが私たちたちの大切な出発点です。サウロもよみがえられたイエスに出会い、赦されました。迫害された方に見れば、サウロの顔など見たくもない。でも、神にとってはそうではない。彼もキリストのからだである教会の一員なのです。

キリストが自分のことを大切に思い、愛しておられる。それと同じようにキリストはサウロのことも愛しておられる。そこに立ち戻ることを

教会は促されていきます。自分たちの好き嫌いで判断するのではない。「イエスはキリストである」と告白する者は、どんな者であろうとも大切なキリストのからだとして結び合わされていく。それがキリストの教会なのだ。そのことを教会は学んでいきました。

31 節にこうあります。「こうして教会は、ユダヤ、サマリヤの全地にわたり築き上げられて平安を保ち、主を恐れかしこみ、聖霊に励まされて前進し続けたので、信者の数が増えて行った。」

しばしば教会の成長を願ってこのみことばを取り上げることがあります。人の数が増えて行くことはすばらしいことでしょう。しかし、何が大切なのかを見落としてはなりません。「主を恐れかしこみ」とあります。エルサレムの教会にとって「主を恐れかしこむ」とは具体的に何であったのか。サウロをキリストによって罪赦された自分たちの仲

間であるとして受け入れるかどうか。そのことでした。難しい決断だったはずですが。それでも最後は、主の御心に従うことを選び取りました。

教会が増えて行く、救われる人が増えて行く。そこにだけ目を奪われるのではありません。エルサレム教会が主をおそれかしこんだ結果、与えられたことです。

私たちはどこを見ているのでしょうか。目に見えることに心が奪われるます。しかし、主は見えない所にこそ目を留められます。「イエスはキリスト」と告白する私たちは、主の御心を求めて歩みたいと願います。